

# 『イーリアス』における身体からだ

生田康夫

はじめに

『イーリアス』を初めて読む読者は劈頭間もない四行目で少し驚くのではないだろうか。それは「自身 autou」<sup>1</sup> ということばの使い方だ。ここでホメーロスは戦いで討たれた死者について、冥界に追いやられる「魂 psyx」<sup>2</sup> に対比し、この世に残り犬共に食われる身体の方を「自身 autou」と呼んでいる。

「雄々しい勇士達の魂 (psyx) を冥王のもとに追いやり、  
彼ら自身 (autou) を犬共の餌食とした」(第一歌 3～4 行)

あらためて我々にとって「自分自身」とは何を指すのか考え

てみると、魂なのか、身体なのか。「魂と身体が一体になったものだ」という答えもありそうだが(この「一体」という表現も興味深い)。しかし現代の我々が「自分自身」とか「みずから」というとき、それを魂と呼ぶかあるいは意識や心と呼ぶかは別にして、漠然と「魂的なもの」をまず念頭におく傾向があり、「身体」は影が薄いようだ。だからこそ『イーリアス』のこのくだりで現代人は不意を衝かれたような感をうけるのだろう。

ホメーロスにとって「自身」とはまず「身体」である<sup>註1</sup>。『イーリアス』は身体感覚、すなわち身体存在や動き、充実や疲労、快さや痛みなどの感覚に満ち溢れている。『イーリアス』には様々な享受の仕方がありうるが、この詩篇を「身体」の感覚の生きた証言集と見ることもできそうだ。本稿ではその諸相を見ていくこととしたい。

『イーリアス』にあらわれた身体の諸相

A. 腑分け

『イーリアス』における身体のあらわれ方は多岐にわたり、そのいずれもが生彩に富んでいる。先ず身体の各部位の表現だが、これはまさに

「頭から足まで」(第十八歌 353行)

でありほとんどすべての部位について名医の腑分けを目の当たりにするかのようだ。

例えば、頭部からいくと、

「彼はこういつて槍を放った。アテーネーはそれを目の脇の鼻に差し向け、白い歯並を買いた。そして不壊の青銅は彼の舌の根元を断ち、切っ先は下顎の脇に突き出た」

(第五歌 290～293行)

目、鼻、歯、舌、顎と普段意識しないみずからの顔の部位の存在と位置関係を再認識させられる。

次いで腹部では、

「そして右の尻を射れば、矢は真つ直ぐに骨の下、膀胱を刺し貫いた」(第十三歌 652行)

更には、

「逃げんとするとところをメーリオネースは追いつがり槍で突いた、隠し処と臍との中間を、そこは憐れな人間にとり戦いで突かれ最も苦しむところである」

(第十三歌 567～569行)

と痛みなしに読みすごすことができない。つられて思わず身を振りそうになる。

脚の方に行くくと、

「先手を取って脚の付け根を突いた、人間の肉がもつとも厚いそこを。槍の切っ先の周りで腱はちぎれ、目を暗闇が覆った」(第十六歌 314～316行)

といった具合であり、生物学教室の人体模型をみるようでもある。

息子ヘクトールが死をいとわずアキレウスと対決しようとしたとき、老王と老母は戦いを避け城内に逃れるよう懇願する。その言葉には痛切な身体への言及がある。

先ずプリアモスは、ヘクトール死後に来るべきみずからの死の様について、王の矜持も父親の威厳もかなぐり捨ててこういう。

「しかし殺された老人の白髪頭や白髭、そして隠し処を犬共が辱める、これは全く憐れな人間にとつて最も惨めなことだ」(第二十二歌74〜76行)

ヘカベーも母親として必死の説得を試みる。

「今度は母親が別のところから涙を流しつつ哀願した。胸をただけ片手で乳房を支え、涙にくれ彼に翼あることばをいった。『我が子ヘクトールよ、これを敬い、私を哀れんでくれ、もしかつて憂いを忘れる乳をお前に差し出したことがあるなら。それを思い出して、愛しい息子よ、敵を防ぐのは城内からにして、前に出てその男に立ち向かうのはよしておくれ』」(第二十二歌79〜85行)

ここには身体の根源にある生と性と死が凝縮している。

## B. 感覚

『イーリアス』にはまた、身体が感じる感覚の生き生きとした、

あるいは生々しい表現がある。

次の詩行は首を後ろから槍で突かれた男の描写だ。

「青銅が歯並に沿って真直ぐに舌を断つと、砂に倒れ、冷たい青銅を歯で噛んだ」(第五歌74〜75行)

実際に青銅を噛んだ経験を持つものは僅かだろうが、この詩行を読んで歯に青銅の味を覚える読者は多いのではなからうか、まるでかつて味わった味を想起するように。味わったことがない味を感じるとは奇妙なことである。真に迫った詩的表現には特有の喚起力があり、そのおかげで、自ら経験した類似の感覚からあるべき未経験の感覚を瞬時に再構成することがあるのだろうか。あるいは、身体には人類の共通感覚のようなものが遺伝的に蓄積されており、詩的表現が時としてそれを呼び覚ますのだろうか。

戦場で仲間と示し合わせる言葉も生の感覚に根ざしている。

「アルキメドーンよ、馬を俺から離して控えておくな、背中にその息がかかるほどにしていくれ」  
(第十七歌501〜502行)

ここでも読みながら背中に生暖かさを感じないだろうか。

そして、慣用句的な表現、例えば、

「彼ががっしりとした槍を執ると、槍は掌に馴染む」

(第三歌 338行)

の「掌に馴染む」とか、

「東ある剣で首を突いて命を奪った。剣はすっかり血で生温くなった」(第十六歌 332～333行)

の「血で生温くなった」とか、これら細部の表現の随所に生の感覚が息づいている。

### C. 仕草

身体の動きには日常的な仕草もある。その表現も豊富だ。

「この時、ヒュルタコスの子アーシオスは呻いて大腿を叩き、怒ってこう言った」(第十二歌 162～163行)

日本語にも「思わず膝を打つ」という似た表現がある【註2】。仕事を終えたヘーパイストが、身体の汗を拭く様はこう描写される。

「そしてスポンジで顔のあたりと両手を、そして頑丈な首と粗毛の生えた胸を拭った」(第十八歌 414～415行)

われわれが日常、汗を拭く順序はまさにこのとおりであることに気付く。

夜中に起こされたネストールの姿勢はこうだ。

「起き上がり片肘をついて頭を擡げ、アトレウスの子に語りかけ、たずねた」(第十歌 80～81行)

「片肘をついて」とはいかにも半分起き上がった感じがでている。

あるいは、アキレウスが新しい武器を鎧う時の様は

「そして神の如きアキレウスは鎧の中で彼自身を試した、彼に合うか、輝く手足はうまく動くかと」(第十九歌 384行)

であり、戦場へ復讐に向う猛者の動きなのだが、われわれが日常服を新調しようとして試着する時の仕草と異ならない。(この場面でも、試したのは身体であるが「自身 *autou*」の語が使われている)

## D. 運動

日常の仕事は身体の動きの一種だが、身体の動きには非日常の、そして時には極限状況での動きもある。『イーリアス』はそのような激しい運動感覚に溢れた描写にも富んでいる。それはこの詩篇が戦記であることも与かっているように。

「アンティロコスが躍りかかって剣でこめかみを突けば、男は磨かれた戦車から喘ぎながら落ちた、真逆様に砂塵の中に額や肩を先立てて。随分長く突っ立っていた、深い砂地に刺さったので。馬がぶつかって地の砂塵の中に打ち倒すまで」（第五歌 584～588 行）

このようにたとえ無惨なシーンであっても、精確かつ透明な描写だ。

「そして双方進みよって至近距離に到ったとき」

（第五歌 850 行）

これは双方の戦士が向き合ひまさに戦いを始めんとする、その動きの描写だ。この簡潔な慣用句的表現は『イーリアス』に何回も出てくる。一見何気ない語句だが戦記物ならではの口吻だ。考えてみるとそもそも一騎打ち開始の動きはいつも同様な

のかもしれない。このように戦場や生活の中で繰返し起こる出来事をそのまま表現で繰り返すことは、後代の文学作品では嫌うことだろうが、『イーリアス』の特徴の一つだ。繰り返しも人生の真実であることを語っているようだ。次の引用はアキレウスのヘクトール追走の一場面だ。

「（ヘクトールが）堅固な城砦の下ダルダノスの門の前に、あるいは上から飛び道具で護ってくれはずまいかと、馳せ寄るべく突進する度に、その度に（アキレウスは）前に先回りをして平野の方へ追い返し、自分は常に城側を走っていった」（第二十二歌 194～198 行）

息詰まるような二人の動きである。

この場面では引き続き夢の比喩が出てくる。これも身体の動きだ。

「夢の中で逃げる者に追いつけないように、逃げとおすこともできず追いつくこともできないように、そのように足で捉まえることもできず、逃げ切ることも出来なかった」

（第二十二歌 199～201 行）

ホメロスがこのような我々も見る夢を見ていたことは驚きだが、考えてみればそう不思議なことではないのかもしれない。

確かに意識の世界ではホメーロスの時代以降三千年近くの間には様々な変化があったとしても、立つ、歩く、走る、などという身体の動きにおいてホメーロスと我々とは基本的に同じであるとすれば、夢は意識に属しているというよりは身体に属しているのだから。

### E. 勢い

『イーリアス』には、動きそのものではないが、身体がまさに動かんとし、勢いがためられ、力が漲っている状況がよく描かれる。

そのような状況を描くのに詩人が好んで用いるのが「勢い込んで *μηλαότερ*」の語（およびその変化形）だ。

「城を壊滅せんものと意気込んで (*μηλαότερ*) 包囲した」(第十一歌 73 行)

「(脳味噌は) 中でかき回された。こうしてそいつの勢い込んだ (*μηλαότερα*) ところを討った」(第十二歌 186 行)

「みずから意気込んでいる (*μηλαότερ*) 両アイアースに言った」(第十六歌 555 行)

「そのように言って、彼は既に意気込んでいる (*μηλαότερον*) アテーネーを促した」(第十九歌 349 行)

と枚挙に暇がない。

類義語による同様の状態の描写も多い。

「嫌々どころではなく (*οἷος δέκοντα*) 戦意満々の (*ἐσθλόμενον*) ピュロス中の兵を集めた」

(第十一歌 716 ~ 717 行)

「メネラーオスはその大いに気負いたつている (*ισχυρότατον*) 馬を軛につけた」(第二十三歌 300 行)

「気負った」りあるいは「勢い込んだ」りしている状態に、身体の詩と真実を見出していたのだろうか。

次のくだりは、アカイア勢でアキレウスに次ぐ勇者アイアースの戦いに勇む言葉だ。

「俺も槍を握る無敵の腕が鳴ってしょうがない、心は勇んでいるし、下では両足もうすぐ、俺ひとりでも戦いに逸って飽きないプリアモスの子ヘクトールと一戦交えんものと意気込んでおる」(第十三歌 77 ~ 81 行)

腕が鳴って身体中ムズムズしているのだろう。戦士の武者震いが髣髴とする。

## F. 動物

動物は「動くもの」の最たるものだ。ホメーロスは *fauna* の詩人であり詩篇は動物に溢れている。野獣や家畜、鳥、爬虫類や昆虫まで、動物記か昆虫記さながらだ。

動物はほとんど人の動きを描写する比喩の中に現れる。次の例では鹿とジャッカルと獅子が登場する。

「さながら、山間で角を生やした手負いの鹿を赤茶けたジャッカル共が襲うようにトロイア勢は襲った。その鹿は人間が弓弦から放った矢で射られたもの、鹿は足で逃げ身体を守るがそれは血が生温く膝が動く間のこと、一旦鋭い矢が鹿の力を奪うと、肉喰らうジャッカル共は山間の陰ある森で引き裂きにかかる。そこに神が凶暴な獅子を連れて来る。ジャッカルは逃げ去り獅子は喰らいつく」

(第十一歌 474〜481行)

人の行動と動物の生感の間に比喩が成り立つとはどういうことか。同じ世界に住み同じ原理に貫かれているということだろう。人と動物は身体の動きをとおして繋がっている。

次の例はアキレウスに喩えられた獅子だが、その表情や動きがありありと描写され鬼気迫るものがある。

「それに対してこちら側からはペーレウスの子が凶暴な獅子の如くに立ち向かった。その獅子を人々は村中で集まって打ち殺そうと気負う。獅子は初めは侮って進むが、血氣盛んな若者の誰かが槍で突くと、口を開けて身をかがめ、歯の周りには泡を吹き、胸中には勇猛心が唸り、尾で左右の脇腹や尻を鞭打つ、そのようにして自身を戦いへと駆り立てる。そして眼をキラキラとさせてしゃにむに突進する、誰か人を殺すか、あるいは自ら群衆の中で命を落とそうと」

(第二十歌 164〜174行)

この鬼気迫る表情や身振りは獅子とアキレウスに共通なのだ。

次に、繰り出す軍勢に喩えられるのは蜂だ。

「あたかも、舂めき合う蜜蜂の群が空ろな岩から続々と繰り出し、集団をなして春の花の上を飛ぶ、あるいは此処に一杯あるいは彼処に、そのように」(第二歌 87〜90行)

なるほど、蜂ほど軍勢に似たものはなからう。

さて、次の例はいわゆる比喩というわけではない。神の示す前兆だ。

「渡らんものと意気込んでいる彼らに鳥が、高く飛ぶ鷺が

軍勢を左にさえぎりながら現れた。血まみれの、まだ生きのたうつている大蛇を爪に挟んでいた。大蛇はまだ戦意を失っていない、自分を掴んでいる奴の胸元、首筋を後ろにのけぞって撃った。鷲は痛みを耐えかねて群衆の中に落とし、風吹く中を鳴きながら飛び去った(第十二歌 200～207行)

前兆というものは人の世に起こるべきことを象徴的に示すものであるから、一種の比喩、いやむしろ究極の比喩とも言える。そしてこの神のもたらす比喩は、このようにしばしば鳥や爬虫類の動きによって示される。

## G. 植物

ホメーロスは *Eruma* の詩人であるといった。たしかに『イーリアス』での動物の活躍ぶりは目覚ましい。しかし植物が全く出てこないわけではない。興味深いのはこの詩篇に登場する植物の多くはその動く姿において捉えられ、それが人のからだやその動きに喩えられていることだ。

「突いてその槍を抜くと、彼はトネリコの木のように倒れた、その木は遠望できる山の頂にあつて伐られ、柔らかな葉を地面に近づける」(第十三歌 178～180行)

ここでは、槍で突かれて倒れる戦士が切り倒されるトネリコの木に喩えられている。

次いで弓矢で射られた戦士のさまはこうだ。

「彼は罌粟のように一方に頭を傾げた、罌粟は苑生にあつて種や春の露の重みに傾ぐ、そのように兜の重みで一方に頭を傾げた」(第八歌 306～308)

花をあくまで動き(それは傾ぐという微妙な動きではあるが)の中で捉えている。花にとつて種子や露の重みは人にとつての兜の重みだ。

次の例はどうか。

「彼らは山の背の高い樅の木のように立ちはだかった、その樅の木は太く長く延びた根を組み合わせ、来る日も来る日も風雨をじつと耐えている」(第十二歌 132～134行)

踏ん張ってじつと耐えているのだからもちろん動いているわけではない。しかしこれも力が漲っている状態にある。決して安穩に静止しているのではない。

ホメーロスにおいて、人は動と力の相のもとで *Phora* とも繋がつているようだ。



## H. 自然

自然現象も人と繋がっている。先ず海の波が軍勢に喩えらるる。

「さながら海の波が吹きつのる西風にあおられてざわめく岸辺に押し寄せる如くに、それは先ず沖合で波頭を上げたかと思うと、岸にぶつかって轟音をたて、岬の両側に頭を持ち上げ潮の泡を吐き出す。その如くにダナオイ勢の隊列は次々と繰り出した」(第四歌422～427行)

そしてヘクトールがアカイア勢に襲いかかる様は落石に喩えられる

「トロイア勢が一齐に押し寄せる、先頭のヘクトールが巖から転げ落ちる落石のようにまっしぐらに突き進む。その落石は崖から冬の川がおびただしい雨で鉄面皮な石の支えを壊し押し転がしたものだ、石は跳ねるように飛び、その下で木々は鳴り響く。石はあくまで一途に走り、平地に到るとそこでは勢い込みつつも漸く止まる」(第十三歌136～143行)

今度は逆に、アイアースの敵の攻撃に耐える様が山の突端に

喩えられる。

「両アイアースが支えた、平野にせり出した木々茂る山の出鼻が強力な川の激しい流れを支え、流れをすべて平野に押し返す、そして流れがそれを壊すことは決してない、そのように」(第十七歌747～751行)

これも激しい動きを抑える力の描写だ。ホメーロスは激しい動きと漲る力との両方に美と真実を見出している。

以上三項で、人の身体の動きと力とが動物、植物、自然に喩えられている様を見てきた。それらの比喩を注意深く観察してみると、それらは動物や植物や自然の擬人化であるというよりも、むしろ人の身体がその動きと力において動植物や自然物と同じ世界の中にあることの証言であるように思われる。

### I. 技能と道具

技能とは「人の身体の力や動きを巧みに活用するわざ」、そして道具とは「人の身体の動きや力を増幅させる物」と一応いえよう。人の身体の動きや力を語って倦むことのない詩人は、技能や道具についても様々な生き生きとした描写をしている。

最初は墨繩を使う船大工の技だ。

「それはあたかもアテーネーの教えによってあらゆる技を心得た腕利きの大工の手許で墨縄が舟木を真直ぐにする如く、そのように両軍の戦いはピーンと互角に張り合った」

(第十五歌410～413行)

同じく船大工が使う手斧については、

「あなたの心はいつも手斧のように弛みを知らない。その手斧は、舟木を技巧みに切り出す人の下で木を裂いていき、人の力を増していく」(第三歌60～62行)

と、斧はまさしく人の手の力を増幅させるものであるとしている。

乗馬の術については次のネストールの語る驚くべき訓戒がある。内容も乗馬の名人ならではの、同時に表現もさすが弁舌の達人である。

「それを神の如きアキレウスが目標としたのだ。それにお前は車と馬を近づけ掠めながら進め、自分は身体をよく編んだ車体の中でそっと左に傾けよ。そして掛け声をかけながら右の馬をけしかけ、手で手綱を緩めよ。目標に左の馬を掠らせしめよ、良く作られた車輪の轂が柱の端に触れるかと思えるまで。しかしその標石にぶつからないようにせ

よ」(第二十三歌333～340行)

「傾ける *anph'ra* クリントンターナイ」というところなどネストールは身体を傾けて語ったであろうし、聴いているアンティロコスも傾けるに違いない(そして我々も)。思わず身体が動くのだ。

もつとささやかな手仕事の例も豊富だ。一つだけ例をあげよう。

「さながら、広い庭で強い風と篩う人の力とによって大きな箕から黒い皮の豌豆まめや団扇豆が飛び跳ねるように」

(第十三歌588～590行)

このような手仕事は、ホメーロスの時代からつい数十年前まで世の東西を問わず身近にふんだんにあったのだった。

#### J. 度量衡

「人間は万物の尺度である」。度量衡の起源にはしばしば人の身体が、あるいは身体の基本的動きがある。英語のフィート(フランス語のピエ)や日本古来の尋(両手を広げたときの左右の手先の間の距離)とか【註3】。『イーリアス』にはさまざま単位がその誕生時の原初の姿で顕われている。

先ず、道の長さが槍の飛ぶ距離で示される。

「濠(の)中に崩して長く広い道を造った、その長さは男が力を試そうとして放つ槍の飛距離くらいもあった」

(第十五歌 357～359行)

次いで、敵の斥候との距離が驟馬の一息に鋤く距離で示される。

「しかし丁度、深い畑で組鋤を引くことにおいて牛に勝る驟馬が一息で鋤く距離ほど離れたとき」(第十歌 351～353行)

もつと近い距離の例も見よう。

徒競走で前の走者と追いつる走者との距離を、機織りの仕事の情景をひいてこう表現する。

「さながら、糸巻きを経糸の間に潜らせていくとき、帯美しい女の胸に機織棒がうまく手繰られて近づくと、そして胸の近くに支えられる、そのように間近にオデュッセウスは迫った、後ろから(前走者の)足跡を砂埃が落ちる前に踏んで行く」(第二十三歌 760～764行)

距離の描写にひかれるものは投擲であり、農耕馬であり、機

織であり、いずれも身体に親しいものばかりだ。そして、この最後の例になると、度量衡というべきか、詩的比喩というべきか微妙だ。しかしそれは無用の詮索だろう。もともと度量衡も比喩も同起源であり、詩人はその共通の発生の姿を捉えているのだろうから。

ところで、上記の例のように『イーリアス』では度量衡のうち、度(長さ)については豊富な表現がみられるが、量(容積)と衡(重さ)はあまりみられない。その理由はおそらく、詩人が「動き」に格別の関心を寄せており、長さが「動き」と密接であるからだろう。

## K. 声

声とは身体が出す音の一部だ。身体が息と咽喉を使って発する音だ。その音は波動となって空气中を伝わり、他人の鼓膜を振動させることもあるしさせないこともある。したがってそれは身体が属している物理的世界の一現象だ。

現代の我々は普段あまり声をそのようにはイメージしていないかもしれないが、『イーリアス』はその事実を思い出させてくれる。

「ゲレーンの騎士ネストールは呼びかけて起こした。する」と声は彼(オデュッセウス)の心のところに行つた」

(第十歌 138～139行)

「声が行った」のであり「声が聞こえた」のではない。声は一種の物なのだ。次の例もそうだ。

「脚速き馬の音が私の耳のまわりを打つ (πάλλει)」  
(第十歌 535行)

「打つ」と訳した πάλλει (パッロー) は石をぶつけたり、飛び道具を当てたりする運動をいう動詞だ。音が物の一種だからこそ「打つ (πάλλειする)」のだろう。声のもとが息であることも次の例は示している。

「そして三回叫んだ、頭が容れる限りで」(第十一歌 462行)

それも抽象的な息ではなく、体積をもった「頭が容れる限り」の息だ。これは『イーリアス』にあらわれた体積の尺度の稀な例といえるかも知れない。

声は物の世界に存在するのであるから、次のようなことも起こる。

「その(盾の)陰に身をかがめた。青銅の槍がその上を飛び

越えると、盾はかすめていく槍に乾いた音を立てた」

(第十三歌 408～410行)

この「音を立てた ἄκουεν (アユーセン)」はほとんど「声を上げた」だ。ここで盾はほとんど咽喉となっている、というより咽喉はそもそもこの盾のようなものだといふべきなのだろう。

声は単に意味を運ぶものだけのものではない。身体から発した声は、それ自体が身体に直接働きかけてくる何ものかだ【註4】。

## L. 女性

ホメーロスが女性美をどのように表現しているか。人の身体について様々な角度から飽くことない観察と深い洞察を行っている詩人だけに、これは興味あるところである。

『イーリアス』には女性の容姿を表す枕詞的形容詞がある。

καλλυρτίποιος (頬美しき)

ἤπικρος (髪よき)

λευκώλενος (腕白き)

εὐχάνωνος (帯よき)

καλλιστροφος (踝美しき)

なるほど、頬、髪、腕、腰（帯）、踝などに詩人の女性美のポイントがあつたのか【註5】。  
踝はちょっと意外だが面白い。

「つややかな足にサンダルを履いた」（第十四歌186行）

という慣用的表現が思い起こされる。戦士の鎧う際にもでてるが、引用した詩行では、履いたのは女神ヘーレーだ。精一杯着飾ったとき最後に履いたのがサンダルだったのだ。このサンダルからは踝が見えるのであろう。

現代人だったら重要視するであろう目鼻立ちや、胸、脚などがでてこないのはどうしてだろうか。美の基準が異なっていたのだろうか。この疑問については、「帯よき」がヒントになりそうだ。「帯よき」は帯そのものにとどまらず当然腰まわりの美を言うのであろう。同様、「頬美しき」は目鼻立ちの美も含んでおり、「踝美しき」は脚全体の美を象徴しているのではなからうか。胸については、枕詞ではないが「美しきのδο περιπλακεία δελφίν」という表現があり、この場合の「δο δελφίν」も女性の胸を言外に指している婉曲語法である可能性がある【註6】。

もう一つ謎めているのは、絶世の美女とされるヘレネーについてもこれらの定型句的表現の域を出ていないことだ。「髪よき ἡρίκομος」と「腕白き λευκώλενος」の形容はあるがそれ

以上の容姿の具体的描写はなされないのだ。

しかし次の詩行は老賢人の言葉だけに真実味がある。

「彼らは槽に向ってくるヘレネーを見るなり翼ある言葉をひそやかに交わした。『これほどの女性のためであればトロイア人と脛当てよきアカイア人達が長い間苦しんだとしても咎められるいわれはない。その容姿は恐ろしいほど不死の女神に似かよっている。しかしたとえそうであろうとも、船に乗って帰るべきだ、我々と子孫とに禍をのこさなために』」（第三歌154～160行）

ホメーロスの詩心は、上記の婉曲語法のように、間接的なしかし想像力をかきたてる表現法を選んだようだ。「咎められるべきいわれはない οὐ γένοιτο」という二重否定的表現は語られぬヘレネーの美しさを際立たせている。

### M:「足が運ぶ」

『イーリアス』には「足が（人）を運ぶ」という一風奇妙な表現が何回か出てくる。何故「歩く」とか「歩を進めた」といわずに「足が（人）を運ぶ」というのか。そこには何か詩人にそういわせる心性が隠されているのではないかと思われる。

先ず「足がパトロクロスを運んだ」箇所を見てみよう。

「『あなたの世話はだれか從卒に任せ、私はアキレウスの許に急ぎ戦いへと促そう、神の助力で説得して彼の心を奮い立たせることができないと誰がいえよう、友の勧めはよきもの故。』このように言つた彼を足が運んだ」

(第十五歌401～405行)

パトロクロスは潰走するアカイア勢を目の当たりにして、何とかして戦列を離脱しているアキレウスを促し復歸させねばと思ひ、彼のもとに向つてゐる。しかし戦列離脱の原因である怒りは深い。そして僚友である自分にとつてさえ、

「恐ろしい男で、咎なき者をすくにも咎めだてしかねない」

(第十一歌654行)

そのような男である。どのようなことばで、どのようにして説得しようか。そのことが意識を領してゐる。

もう一つ見てみよう。上の第十五歌の引用から事態は進み、今度はパトロクロスが討たれ、その悲報を知らせようとアキレウスのもとに泣きながら向うアンティロコスに「足が運ぶ」。

「涙を流している彼を足が運んだ、悲しい報せをペーレウスの子アキレウスにもたらさんとする彼を」

(第十七歌700行)

意識が何かに没頭し捉われているとき、身体は意識の指令を待つまでもなくみずから動くのではないか。

更に事態は進展し、パトロクロスの復讐をせんものとアキレウスは戦列復歸を決意する。そのアキレウスの武器製作依頼のためヘーパイストスのもとに赴くテティスを「足が運ぶ」。

「自分の息子に榮えある武具を持つてこようと出かけていった。その彼女をオリュンポスへと足が運んでいった」

(第十八歌147～148行)

このときテティスの心を領してゐたであろう思ひ、それは少し先でヘーパイストスに語られている。すなわち自らのつたない運命、そしてそれ以上に息子のつたない運命への思ひである。この「足が運ぶ」の表現の他のいくつかの箇所も、あるいは戦鬪で憔悴したりあるいは逆に自らの雄姿に酔つたりして心ここにあらずのくだりである。

内臓の動きや呼吸、脈拍などは勿論だが、それらに限らず身体は常に意識の支配下にあるのではない。身体の地平は意識の領域をこえて彼方に広がっている【註七】。

## おわりに

本稿冒頭で、人の死後について、「魂」と「自身であるところの」身体」が対比して語られる一節を引用した。

死後、まず魂の方はどうなるのか。魂が身体を離れる瞬間を歌った詩行がある。

「魂は四肢を出て冥界へと飛んで行った、彼の死を嘆きながら、雄々しさと若々しさを残して」

(第十六歌 856～857行、第二十二歌 362～363行)

魂が「彼の死を嘆く」とは悲痛である。

次いで、亡きパトロクロスの魂がアキレウスの夢見に立った直後の、このような場面がある。

「このように言って彼は自分の手を伸ばしたがつかめなかった、魂は小さな声を上げながら煙のように地下に消えてしまった。茫然としたアキレウスは両手を打ち嘆息して言った。『おおなんと、冥界においても何ものかがあるのだ、魂とか亡霊とかが、全き生氣はないにしても』」

(第二十三歌 99～104行)

身体を失った魂は煙のようであり手で捉えることが出来ない。

さて、このようにして魂が去ったあと、身体すなわち遺体の方はどうなるのか。死者への礼である哀悼を捧げられた上で火をもつて葬られるのか、それとも詩篇冒頭四行目のように「犬どもに喰われる」のか、それが戦場で死にゆく勇者にとつて究極の関心事だった。

一つ前に引用した詩行（「魂は四肢を出て……」）は第十六歌と第二十二歌と全く同一詩句で出てくる。第十六歌ではパトロクロスの死を歌い、第二十二歌ではヘクトールの死を歌う。

前者パトロクロスの遺体はアキレウスによって死者への礼を尽くした後、手厚く葬られる。一方後者ヘクトールの遺体は危うく犬どもに喰われようとし、そこで大団円のプリアモスとアキレウスの面会の場面へと繋がる。老父プリアモスは殺戮者アキレウスに息子の遺体返還を懇請し、アキレウスはそれを許す。詩篇最終節はヘクトールの葬礼に捧げられ、詩人はヘクトールの遺体への愛惜を籠めてこの身体の証言集を閉じる。

「このように彼らは馬を駆るヘクトールの串いを営んだのであった」

*ὄς οἱ γ' ἀμείλιτον τάρων Ἑκτορος ἱπποδάμοιο.*

(第二十四歌 804行)

全一万五千行からなる『イーリアス』の最終行がこれだ。繰り返される「〇」音からはヘクトール挽歌の木霊が聞こえてくるようだ。

註

【1】 振り返ってみると、日本語の表現でも「自身」は「身体」の「身」を含んでいる。のみならず、「身(み)」という和語そのものに古代から「体」の語義と「自身」の語義があったようだ。例えば「古語大辞典」(小学館、一九九三年)をみると、「身(み)」の項の説明として第一に「(心に対して)体、肉体」の語義を掲げ、第二に「わが身、自身」の語義を掲げている。そして、前者には

しらぬひ 筑紫の綿は身につけて いまだは着ねど 暖かに  
見ゆ(三三六)

の用例を、後者には

しずたまき 数にもあらぬ身にはあれど 千年にもがと思  
ほゆるかも(九〇三)

の用例を付している(「しずたまき」倭文手纏」は粗末な織物の腕輪で「数にもあらぬ」にかかる枕詞)。ホメーロスに限らず古代人は「自身」や「みずから」とは「身体」のことであると捉えていたのだろうか。

【2】 日本語で「思わず膝を打つ」という時、「膝を」とはい

うもの実際の動作で打つのは古代ギリシアの「大腿を叩く」と同じように大腿だ。したがって動作としては同じだが、意味するところは異なるようだ。日本語の「思わず膝を打つ」は何か思いついたり感心したときの仕草であり、一方古代ギリシアにおいては嘆きや怒りの仕草である。

【3】 古代ギリシア語にも、英語のフイートに対応した *teōs*、日本語の尋(ひろ)に対応した *opynd* がある。前者はホメーロスに用例がないが、後者はネストールのことばのなかに出てくる。

「乾いた木が立っている、地面の上に一尋(*opynd*)ほど  
のだ」(第二十三歌37行)

ただし、この *opynd* は既に単位として制度化された用例のようだ。これに対して本文に引用する例においては、いずれも身体に由来する尺度がもとの身体感覚を生きた状態を保っている。

【4】 身体から発した声は意味を運ぶだけのものではなく、それ自身が身体に直接働きかけてくる何ものかだ。この事実を「イーリアス」という詩編の存在そのものが証している。「イーリアス」はその意味内容を伝えるだけのものではない。それも、「イーリアス」がもともとホメーロスの声であってみれば当然のことかも知れない。ホメーロスによって吟唱されたこの詩篇は、脈拍や歩行のリズムの如く反復される六脚詩律と随所で出会う広義の擬声、擬態的音調などによって、その事実を雄弁に語っている。現代のわれわれも「イーリアス」の原詩を音読したりその音読を聴いたりする時、詩篇はより力強く響き詩情が一層深まる感をおぼえ



る。それはその時、われわれもホメーロスやその聴衆と同様、詩律や音調を咽喉でそして鼓膜で体感するからに違いない。

【5】 頬、髪、腕、腰、踝の内、髪については万葉集にもよく詠まれている。

をとめらが放(ハナ)りの髪を 由布の山雲なたなびき

家のあたり見む(二二四四)

朝寝髪我はげづらじ愛(ウルハ)しき君が手枕触れて

しものを(二五七八)

また腰についても、長歌中に腰のくびれをじが蜂(すがら)に擬した詩句がある。

……腰細のすがるをとめのそのかほのきらきらしきに

……(二七三八)

【6】 咽と胸の両義を持つフランス語 *gorge* が想起される。

【7】 日本語でも例えば、大好物には「手をのばす」ではなく「(思わず)手がのびる」と言うし、相撲の熱戦を見ていて引き込まれると「(思わず)身体が動く」のであって「身体を動かす」のではない。

こう考えてみると「歩み」についても(意識が何かにとられていた時)「足を動かす」ではなく「足が動く」と表現することに不思議はない。しかしホメーロスは更に進めて「足が(人を)運ぶ」といつている。そこには詩的諧謔が感じられるが、それは単なる表現上の技巧では決してない。この表現の奥には身体が自身 (*autopose*) であるとする心性が脈打っているようだ。